



乙事凶鑑

乙事区お宝凶鑑

乙事区
2023年3月

乙事学 お宝凶鑑目次

- | | |
|----------------------------|-------------------|
| 1 まえがき | 2 3 夕日山地蔵寺跡 |
| 2-3 乙事史跡マップ① | 2 4 関谷の五輪塔 |
| 4-5 乙事史跡マップ② | 2 5 櫛之尾根の金山神社 |
| 6 山の神 | 2 6 次郎兵衛狼退治と祠 |
| 7 山岳信仰 | 2 7 乙事陣場 |
| 8 鬼門様 | 2 8 阿弥陀堂 |
| 9 犬の穴(狼落とし) | 2 9 下社跡(乙事諏訪社下社跡) |
| 1 0 稗の底 | 3 0 三峯神社 |
| 1 1 富蔵山 | 3 1 弓箭神社 |
| 1 2 御別当大明神 | 3 2 道(棒道・逸見道・嶽道) |
| 1 3 御鍬大明神 | 3 3 桜沢山観音 |
| 1 4 乙事諏訪社① | 3 4 五味太郎左エ門と太郎乙 |
| 1 5 乙事諏訪社② | 3 5 道祖神・お神楽 |
| 1 6 馬伏場
(乙事沢、大久保、東原、蔓根) | 3 6 乙事の馬市(仔馬市) |
| 1 7 普賢菩薩(甘酒ばばさ) | 3 7 中丸沢の道づくり |
| 1 8 医王山法隆寺(十一面観音堂) | 3 8 昔の暮らし |
| 1 9 六地藏石幢(石燈籠) | 3 9 盃流し記念碑 |
| 2 0 平林山薬師庵と薬師堂 | 4 0 乙事学凶鑑の作成について |
| 2 1 秋葉様の石燈籠 | |
| 2 2 綿の芝湧水 | |



まえがき

私たちの乙事は歴史の古い地区です。建仁2年（鎌倉時代 1202年）に「音骨」の名前が記録に出てきます。また、延徳2年（室町時代 1490年）には稗の底の住人も移住してきた記録があります。その後「乙骨」「乙事」と地名が変わってきていますが、村人が皆で仲良く協力してきた歴史が、「諏訪の殿様からのご褒美祭り」などの記録からもうかがえます。

これら長い歴史の記録は、天正10年（安土桃山時代 1582年）に織田勢により、諏訪神社や地蔵寺はもとより、多くの民家が焼き尽くされるなど悲惨な目にあい、多くの資料が紛失しています。

そのような状況のなかでも乙事の歴史について、先人の郷土史家の先生方が調査研究をして少ないながらも古文書として残っています。近年では「旧乙事文化研究会」の皆さんによってその古文書が読み解かれ、新たな研究結果の事実も加えられながら資料をまとめていただいております。

先生方の高齢化が進む中で、貴重なお話の聞き取りやこれら散在する研究資料をまとめて後世に残すことの必然性を感じ「乙事学プロジェクト」を立ち上げました。

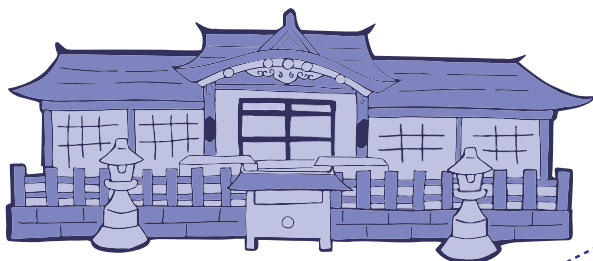
この「お宝図鑑」「お宝マップ」はこれまで既刊の「乙事散策ガイドブック」「乙事区指定史跡・文化財」を補完したものです。書籍にするとともに、ホームページに掲載し何時でも現地を廻りながら閲覧できるようにしました。

乙事の貴重な歴史資産とその背景を知り、私たちがこれからこれらの歴史を守り伝えていく一助となることを願っております。

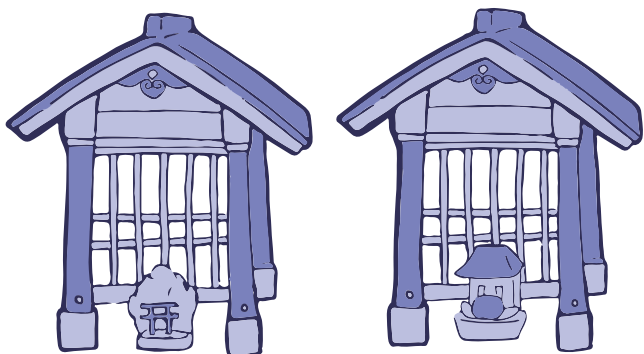
乙事学プロジェクト推進委員会

乙事史跡マップ

乙事学史跡マップは令和4年度に
区長の下、「乙事文化保護委員会」を軸に
乙事学推進プロジェクト推進委員会を結成し
区内の歴史家の先生方のご協力の下作成しました。

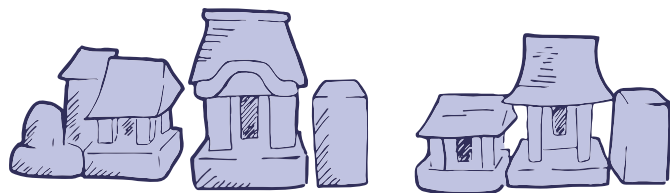


乙事諏訪社



三峰神社

弓箭神社

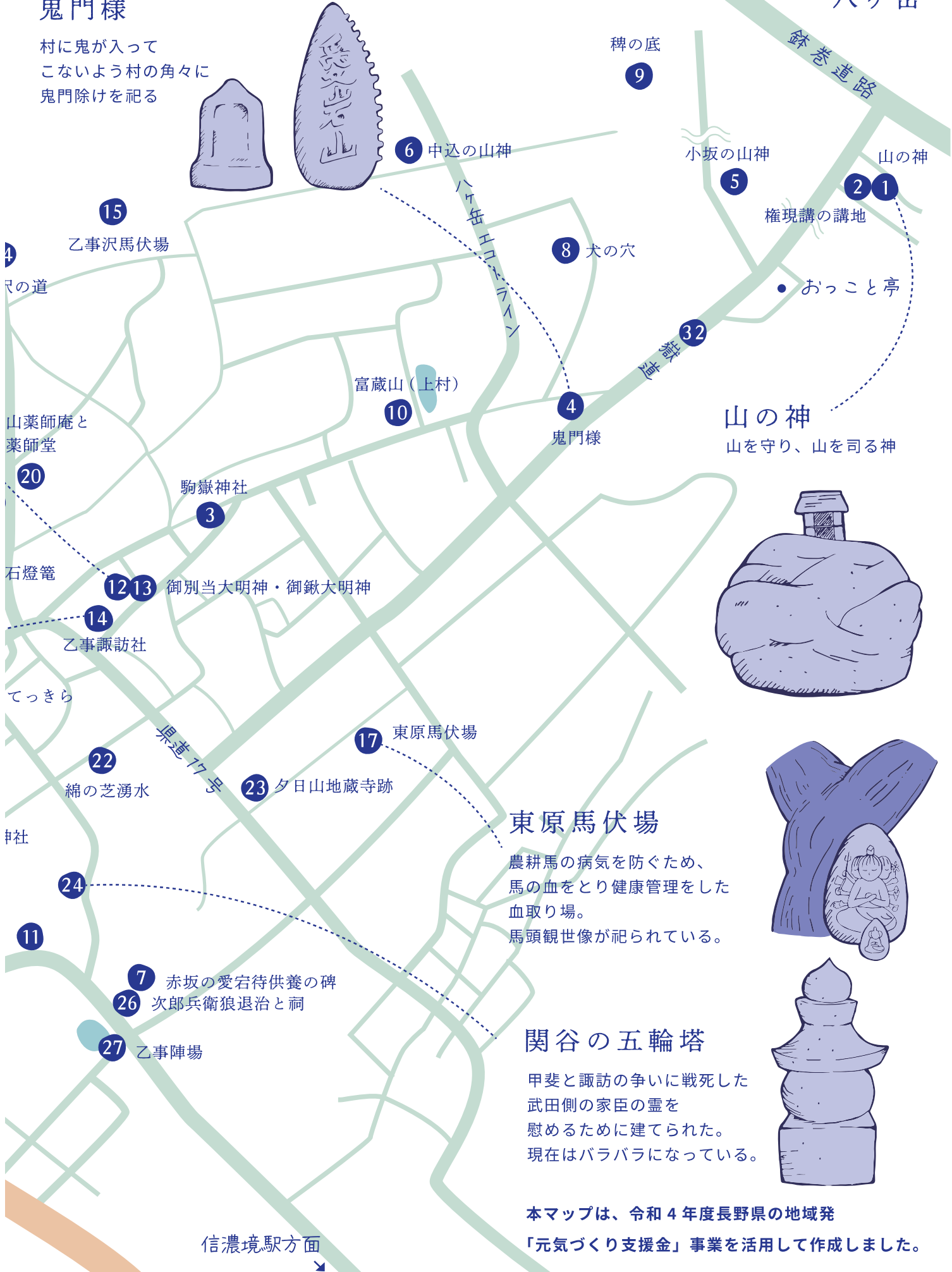
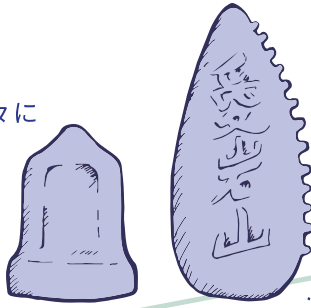


御別当大明神・御鋏大明神



鬼門様

村に鬼が入ってこないと村の角々に鬼門除けを祀る



稗の底 9

小坂の山神 5

山の神 1, 2

6 中込の山神

8 犬の穴

権現講の講地

おっこと亭

15 乙事沢馬伏場

4 尺の道

山薬師庵と薬師堂

20

3 駒嶽神社

石燈籠

12, 13

御別当大明神・御鋏大明神

14

乙事諏訪社

てっきら

22

綿の芝湧水

神社

24

17 東原馬伏場

23

夕日山地蔵寺跡

11

7

赤坂の愛宕待供養の碑

26

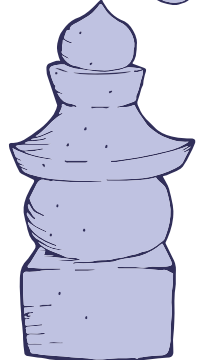
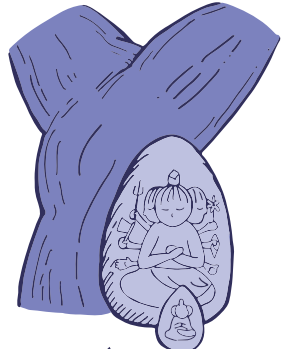
次郎兵衛狼退治と祠

27

乙事陣場

山の神

山を守り、山を司る神



東原馬伏場

農耕馬の病気を防ぐため、馬の血をとり健康管理をした血取り場。馬頭観世像が祀られている。

関谷の五輪塔

甲斐と諏訪の争いに戦死した武田側の家臣の霊を慰めるために建てられた。現在はバラバラになっている。

本マップは、令和4年度長野県の地域発「元気づくり支援金」事業を活用して作成しました。

信濃境駅方面

山岳信仰めぐり

1 山の神 ■

山を守り、山を司る神

2 権現講の講地、3 駒嶽神社

山岳信仰とは、自然の災害等に対し、山の神様に拝み、助けを請うもの。乙事では権現講、駒嶽講、三峯講などがあったが、現在では権現講のみ残っている

4 鬼門様 ■

- 5 小坂の山神、6 中込の山神
- 7 赤坂の愛宕待供養の碑

村に鬼が入ってこないよう村の角々に鬼門除けを祀る

富蔵山 (10 上村、11 下村) ■

乙事は馬とのつながりが深い集落であり、馬を守る神の富蔵山の石碑が立っている。

14 乙事諏訪社 ◎◎

1811年に諏訪明神の勧請が行われ、祭神に健御名方神を祀り、乙事諏訪社上社、下社となる。1950年の修復を機に、下社の本殿が移築され、乙事諏訪社となった。

12 御別当大明神 ■

乙事の産土神（生まれた土地の守護神）として稗の村の産土神であった御別当明神を祀ることとした。

13 御鋤大明神 ■

百姓の神様、300年に一度大祭が行われる。

19 医王山法隆寺 ○■

1652年開基。現在は十一面観音堂のみが残っている。

石仏・石燈籠

19 六地藏石幢 ■

稗の底村の大先神

21 秋葉様の石燈籠

火伏の神様である秋葉神社の石燈籠

24 関谷の五輪塔 ■

甲斐と諏訪の争いに戦死した武田側の家臣の霊を慰めるために建てられた。現在はバラバラになっている。

五味太郎左工門ゆかりの地

五味太郎左工門は、1575年長篠の戦いの後、乙骨邑に引き籠って名主を勤めていた。1582年に徳川軍に協力するようになり家康から信頼、頼りにされ、八王子屋敷と乙事の姓を与えられた。

25 櫓之尾根の金山神社

太郎左衛門の屋敷があった場所

28 阿弥陀堂

太郎左工門の護持仏の阿弥陀如来等を安置、昭和62年の焼失

29 下社跡 ■

太郎左工門の屋敷神であったものを末裔が氏神とした。

歴史・文化湧水めぐり

9 稗の底 ○

(西出口、中出口)
昔、稗の底に村があったが、厳しい自然環境のため下の方に移住し、廃村とある。現在は湧水地。

22 綿の芝湧水

乙事区発祥の地ともいわれる湧水。戦国時代に織田信忠勢に焼き払われ、西寄りに村づくりをしたのが今の部落

20 平林山薬師庵と薬師堂

1627年に建立。1511年に武田の家臣三井蘭之助基光が入道して開く。

31 弓箭神社 ■

諸所の願い事、馬の病気、眼病に願いが叶えられる「お弓箭様」として信仰されていた。

37 即身仏入定跡

江戸時代に疫病が流行り困っていた時、乙事に来たお坊さんが「村を救ってやる」と穴を掘り入定された。

8 犬の穴 ○

高島藩の指示を受けて作った狼（いぬ）落としと呼ばれる落とし穴。

26 次郎兵衛狼退治と祠 ■

1799年に次郎兵衛が村人を殺そうとした狼を仕留めた。

30 三峯神社 ■

猪や鹿の被害を防ぐため、狼を祀る三峯講の神社

戦国時代にゆかりのある場所

23 夕日山地蔵寺跡 ○

1582年織田氏の兵火により焼失。3体の地蔵尊が残っている。

27 乙事陣場 ○

徳川家康が諏訪を配下にせんと足場に陣を構えた場所

馬を大事にしていた文化・歴史

馬伏場 ■

(15 乙事沢、16 大久保、17 東原、18 蔓根)
農耕馬の病気を防ぐため、馬の血をとり、健康管理をした血取り場。馬頭観世像が祀られている。

19 乙事の馬市

乙事は諏訪近辺唯一の馬市（仔馬の競り市）が現在乙事公民館の場所で行われていた。

その他

32 嶽道

権現信仰から権現岳より乙事諏訪社に通じた道

35 口留番所

領内から他領に通ずる交通の要所に設けられた口留や穀物に関する監視や取り締まりを行った番所

33 桜沢山観音

中組名取家の宗左衛門成俊の妻が四国及び西国を巡礼し、信心を広く伝えたことで、観音堂として建立。

34 中丸沢の道

1932年から10年を経て本郷小学校への通路として乙事区民の手により建設された。

36 てっきら

冬になれば年寄りがわら細工を作っていた小さな丘の上の穴倉があった場所で「てっきら」とよばれていた場所

19 普賢菩薩（甘酒ばばさ）■

木喰上人が乙事に来て彫り上げた、微笑み仏。乙事公民館に所蔵

山の神

山の神とは山を守り山を司る神。春になると里に下り田の神となり、秋の収穫が終わると山に戻り山を守るという。

松林の中の自然石である岩座（いわくら）の上に奉った祠の前で今でも区諸役が早春に神事を続けている。元々富士見高原リゾートのゴルフ場内にあったものを移し、現ヨドバシカメラ保養所駐車場下の“山の神区有地”にある。祀られたのは寛保2年（1742年）。

（出典）乙事区指定 史跡・文化財（令和元年度乙事区文化財保護委員会）
富士見町乙事散策ガイド（信濃路てくてく）



【佐久吉文さん談】

山の神を拝むことを通じ、山・森を大切にし、自然環境を守る取り組みにもつながった。

山の神は、春には里に下り、農作物を守り、秋の取り入れが終わると、山に戻り、山を守っている。

山岳信仰

山岳信仰とは地震、雷、台風等人間の力ではどうしようもできない自然の災害等に対し、高い秀麗の山の神様に拝み、助けを請う。講とは二人以上で神仏を信仰して活動することである。

乙事では、以下のような山岳信仰に係る講がこれまで存在していた。権現講、駒嶽講、三峯講(埼玉が発祥)があったが、現在では、権現講のみが残っており、権現講の講社が乙事諏訪社の敷地内にある。

(出典) 山岳信仰(佐久吉文著)及び聞き取りメモ

【佐久吉文さん談】

山岳信仰について

～山岳信仰が乙事地域のつながり

まとまりに繋がった～



【駒嶽講】



【権現講山の神】



【権現講社】

場所 乙事史跡マップ番号 権現講の講地② 駒嶽神社③

鬼門様



【鬼門様】

鬼門とは愛宕山信仰で、昔、京都の北北東にある愛宕山にいた鬼が人々を苦しめた。この鬼を退治したのが、役の小角という行者だといわれ。

この事から村々では鬼が入ってこないよう鬼に苦しめられないよう、村の角々に鬼門除けを祀ったと謂れている。



【小坂の山神】



【赤坂の愛宕待供養塔】

鬼門尾根村上水道設備上の角にあるが設置年は不明。このほかにも鬼門除けと言われている小坂の山神、中込の山神、赤坂の愛宕待供養塔がある。

いぬ あな 犬の穴 (狼落とし)

江戸時代の八ヶ岳南麓では狼が多く生息し、人馬の被害も出て大変な脅威であった。乙事村でも明和2年(1765年)と文化3年(1806年)に被害があり、また寛政2年(1799年)次郎兵衛の狼退治は良く知られている。

被害に悩まされていた村々では、駆除について高島藩に口上書をもって願い出るなどし、文政5年(1822年)高島藩の指導を受けて「狼(いぬ)落とし」と呼ばれる落とし穴を作った。しかし、乙事では犬の穴(落とし穴)の地名も残り、その存在が語り継がれてきたが、その存在・実態は不明であった。

そこで平成26年、富士見町教育委員会に乙事文化研究会から「乙事の狼落とし実在調査について」相談があり、平成27年に乙事財産区・乙事文化研究会・乙事区が主体となり、8月に現地調査、11月に発掘調査を行いその存在が明らかとなった。

構造は外径12m、内径8m、深さ2.8m。壁の石積みは底から最大1.5mでそれよりも上は土塁である。そして穴の中央が小山のように高く掘り残してあった。

日本各地で狼を捉える目的で穴が掘られたが、調査によって規模や構造が明らかになったものとしては立沢に次いで富士見町で2例目であり、他とは構造が全くことなり落とし穴にも様々な構造、工夫があることがわかった。また当時の習俗を知り伝える意味で学術上でも貴重なものである。

(出典) 乙事区「狼落とし」確認調査概要 富士見町教育委員会 平成27年(2015年11月22日)他



場所 乙事史跡マップ番号⑧

【五味長三さん談】

この穴は、上手組の人々により作ったもので、下組は母沢に作った。新田次郎の母親は乙事生まれ。新田さんは、乙事の家で祖父の話を聞いた際、狼の話も聞き、文を書き小説家になった。

ひえ そこ 稗の底



【稗の底村跡】



【西出口（稗の底出口）】



【大先神社と参道】

【五味洋一さん談】

稗之底村は武田信玄の軍事基地であった。信玄が境筋の編笠山南麓を甲府盆地の一部として見たのは、天下取りに必要とみただから。今の富士見が世に出るには、諏訪の片隅という発想を大転換し、東京に近く自然がまだ残る里「八ヶ岳南麓」を山梨県と共有した大舞台で国策の地方創生を取り入れ、より上質な商品を作り、より質の良いお客を誘致する、今様武田信玄の出現に期待したい。

昔、稗の底には村があったが、とても厳しい自然環境にあったため下の方に全て移住したという。現在は稗の底という湧水となっている。

古村付近は深い森林に覆われていて、現在は跡形もない。非常に小さな村であったため台帳にも記録されていないが、康生元年（1455年）稗の底神（大先神社）建立、このころが稗の底村の始まりと言われている。

室町時代の延徳2年（1490年）に、立沢、新田に移住し、また乙事への移住者もあった。寛文元年（1661年）最終的に乙事に退いて廃村となった。

（出典）乙事・富士見・境筋（久保田西蔵）他、聞き取り。

とくらさん
富蔵山



【上村の百々溜池の入り口】

上村は百々溜池の入り口に、下村は関谷の山の中に石碑がある。

下村では、若者が干し草を集めて、販売し、宴会の経費にあてた。

(出典)

乙事区指定 史跡・文化財

(令和元年度乙事区文化財保護委員会)

富士見町乙事散策ガイド(信濃路てくてく)



【下村の関谷】

【佐久吉文さん談】

乙事はとても馬を大切にしており、大きな馬市が有名だった。至る所に馬由来の石碑がある。

場所 乙事史跡マップ番号 富蔵山(上村)⑩ 富蔵山(下村)⑪

ごべっとうだいみょうじん
御別当大明神

乙事の諏訪神社は、はじめ御別当社として室町時代、応仁年間(1467年～)に始まり、延徳年間(1489年～)に建御名方命を祭神として勧請し、祀られたといわれている。

乙事村の産土神(生まれた土地の守護神)は、稗の底村で産土神として祀られた御別当明神を祀ることとし、御別当社とした。御別当明神は産土神であったが、この地方が諏訪明神の神領であった関係から諏訪明神の別当神として祀られるようになった。

御別当明神は、元々神社の上方にあったが、御柱祭の折に神社の北方に、御鋏大明神とともに移動した。御別当明神を祀りはじめたのが今の神社境内の始まりになった。

(出典) 乙事区指定 史跡・文化財



場所 乙事史跡マップ番号⑫

おくわだいみょうじん
御鋤大明神

御鋤大明神とは、百姓の神で1470年に始まる。300年に一度百姓に使う道具を作り、それを飾って祭る御鋤大明神祭が行われる（令和5年現在から255年前の1768年に開催されている）元は大上手組にあったものを乙事諏訪社の境内に立てた。

この大祭は百姓道具を作り、それを飾って奉る行事である。祭の年は、村中数か月百姓道具を作り、祭りが終わると身体が疲れ果て、体は綿のごとくになり、あたかも骨ばかりとなる。よっておらが村は乙骨村となり、後に乙事と呼ぶようになったという説もある。

次の大祭が行われる年は2068年となる。

（出典）佐久吉文（諏訪史談会：史蹟要項四、本郷村編）、三井清エ門、三井照繁
（富士見の自然と文化を守る会「高原の自然と文化」第9号「御鋤大明神祭り」）



場所 乙事史跡マップ番号⑬

おっことすわしや
乙事諏訪社



正面の拝殿、その奥に幣殿がある。鳳凰が羽を開いた形状と言われ、両脇の羽にあたる部分が片拝殿と呼ばれる。拝殿と幣殿が現代は国の重要文化財に指定されている。

乙事には、古くから2つの神社があり、上の産土神（のちの上社）は、御別当明神を祀る御別当社として1490年に今の地に鎮座したといわれる。下社はもともと太郎左エ門の屋敷神であったものを末裔が氏神としたもの。やがて鎮守神として祀られるようになった。

1811年に両神社ともに諏訪明神の勧請が行われて、祭神に健御名方神を祀ることになり、それぞれ乙事諏訪社上社、同下社とした。諏訪大社上社本宮の再建に際し、嘉永2年（1849年）乙事の負担で、本宮拝殿及び脇拝殿を譲り受けた。また、諏訪大社前宮に移建された幣殿も、嘉永6年（1853年）前宮奥殿を建造する代わりに、乙事に移建されることとなった。これは、江戸時代の文禄元年（1592年）に諏訪大社上社が立て替えられた際に神宮寺上社仮殿を譲ってもらったという前例、乙事が大祝の知行所で、古くから諏訪大社と特別な関係を持っていたことが背景と考えられる。

【五味長三さん談】

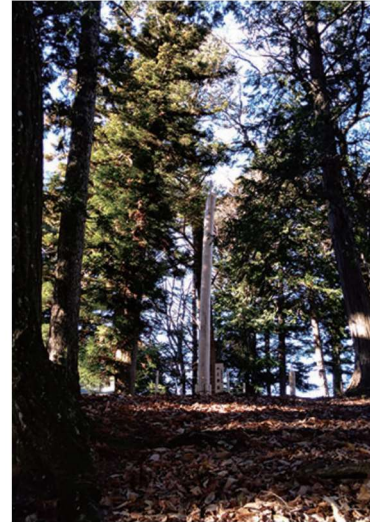
武田勝頼により建て替えたのを、織田軍は焼き、その時持ち出した扉により、家康の命により作った建物が乙事へ来たものです。

【三井武比呂さん談】

終戦後にGHQの指令で国宝が多すぎていけない、洗い直しをするということになり、国宝であった乙事諏訪社が重要文化財になってしまった。

昭和5年、乙事諏訪社の拝殿・幣殿が桃山様式の建造物できわめて優秀とのことで国宝に指定された。乙事諏訪社は、昭和23年に火災にあった際、扉が室町期の貴重なものであることを知っていた乙事の人々が火の中に飛び込み取り外した。

昭和25年、修復費用を乙事で負担し、地元の大工、青年団のメンバーや婦人会など乙事ぐるみで、この扉を用いて神社の修復を行った。これを機に下社との合併が行われ「乙事諏訪社」となり、下社の本殿も移築された。



(出典) 佐久吉文 (諏訪史談会：史蹟要項四、本郷村編)、三井清エ門、三井照繁
(富士見の自然と文化を守る会「高原の自然と文化」第9号「御鍛大明神祭り」)

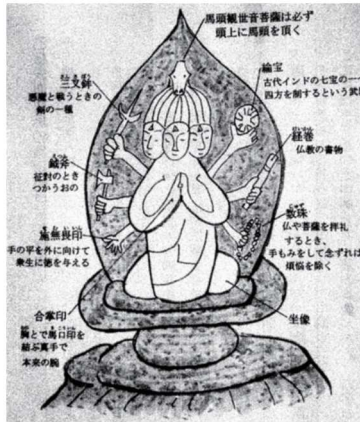


【三井清エ門さん談】

乙骨村は、諏訪大社の上社の大祝(おおほうり：神社を守っている一族)の知行所であり、年貢を大社に納めていたから社殿を譲りうけることができた。移築や火災後の修復にあたっては乙事の人たちの大変な努力と苦労があった

うまふせば
馬伏場
(乙事沢、大久保、東原、蔓根)

◀東原



【佐久吉文さん談】

三面八臂の観世音菩薩は、三つの顔と八つの腕（臂はひじの意で腕と解す）で、一人で数人分の働きをする例え（広辞苑）である。

乙事には馬伏場（血取場とも言う）が四ヶ所あり。

農耕馬として働き続けた馬も、冬期間は働くことも少なく食べるだけで、肥満化し体内の血液が多くなり「ネエラ」という馬の病気になる。

これを予防するため、乙事では四ヶ所に血取場という所を設定して、冬の間馬の体内で多くなった血を、春に注射器で取り馬の健康管理をした。乙事に獣医の知識を持つ伯楽様という人がいて、馬の首から血を取った。またこの血取場を馬伏場と呼び、馬頭観世音菩薩像が祀られているほか、人々は愛馬の死後、馬の供養として馬頭観世音の石碑を奉納した。

(乙事沢と東原は三面八臂、大久保と蔓根は一面二臂の菩薩像)

(出典)「乙事の信心 山岳信仰」(佐久吉文)



◀大久保



◀乙事沢



◀蔓根

場所 乙事史跡マップ番号 乙事沢馬伏場⑮ 大久保馬伏場⑯ 東原馬伏場⑰ 蔓根馬伏場⑱

普賢菩薩 (甘酒ばばさ)

普賢菩薩を作った木喰上人は、享保3年(1718年)、甲州古関丸畑の名主伊藤六兵衛の次男として生まれる。45歳の時に常陸国(茨城県水戸市)の真言宗羅漢寺で、師の木喰観海上人から木喰戒(火食を断つ、五穀を断つ、蕎麦や木の実を主食とする)を受け、木喰上人となった。木喰上人は、諏訪地方には5回訪れている。

そのとき作られた木喰仏



天明元年(1780年)

天明6年(1786年) 2躰・・・普賢菩薩像(甘酒ばばさ)

享和2年(1802年) 7躰

文化3年(1806年) 11躰

文化4年(1807年) 2躰

乙事滞在は、天明6年3月26日から三泊の記録が残っている。

[御宿帳より]

木喰上人69歳の時。

26日、サジヘモン

27日、ヒヤウザイモン

28日、シャウザイモン



*『富士見町の指定文化財』の中には、「北原九郎左衛門の家に3日間逗留して彫り上げたと伝えられている。」と記載されている。

普賢菩薩像の背面には、天明6年4月14日と書かれていて、御宿帳の記録とはずれている。御宿帳にはこの間乙事に来たとの記載がないが、4月に九郎左衛門の家に逗留して普賢菩薩を彫ったとも考えられる。

普賢菩薩像(甘酒ばばさ)は、初期の木喰仏

木喰仏は、微笑みを浮かべていることから”微笑仏”とも呼ばれることがある

現在分かっている木喰仏では、普賢菩薩は乙事にある甘酒ばばさのみ。

普賢菩薩像は現在乙事公民館に所蔵されている。

(五味一磨さん、鈴木清さんからの聞き取り、鈴木清さん作成資料より)

場所 乙事史跡マップ番号⑩

医王山法隆寺

(十一面観音堂)

医王山法隆寺(いおうさんほうりゅうじ)は、起立書によれば、承応元年(1652年)の開基で、本尊十一面観音像〔町指定有形文化財〕を安置し、真志野村善光寺の僧宥性を招請したとある。

諏訪大社上社如法院(きよほういん)の末寺として存続してきた。明治7年、乙事学校設立のため、十一面観音堂のみ残して取り壊された。現存する十一面観音堂〔町指定有形文化財〕は、天明3年(1783年)に改築されたもので、棟梁は境筋宮大工の名手といわれた小池佐兵衛芳富・小池佐藤太泰定 親子。彫刻は大隈流の伊藤長佐衛門が担当した。



三間堂であるが、背面に半間幅の仏壇を設ける。屋根は寄棟造りで茅葺き(現在は鉄板覆)向拝がつく。禅宗様式を多用し、粽付きの丸柱に頭貫・台輪を組み、簡素な組物で軒を支える。

内部は、背面側通り中央間の柱を来迎柱として、中央須弥壇には、入母屋造りで正面に軒唐破風をつけて妻入とした一間厨子(1790年)を安置する。

法隆寺本尊は、十一面観音像〔町指定有形文化財〕 御長 壺尺余(約30cm)
十一面観音堂本尊は、十一面観音像〔町指定有形文化財〕 御長 七寸二分(約27cm)

如法院の廢院により次のものを譲り受け所蔵

- ・大日如来像 ・釈迦如来像 ・大般若経 六百卷
- ・毘沙門天像 ・不動明王像二体 ・興教大師像
- ・五具足 〔町指定有形文化財〕

(現在は、乙事区役所2階に所蔵)

出典「諏訪の社寺と名匠たち」



場所 乙事史跡マップ番号⑩

ろくじぞうせきぞう
六地藏石幢
(石燈籠)



▼地藏様



十一面観音堂前に建立されている石灯籠は、康生元年(1455年)に建立した稗の底村の大先神に祀られたもの。

稗の底村に暮らしていた住民が、明歴2年(1656年)に村を去る際に、乙事に移設したものである。

場所 乙事史跡マップ番号⑩

へいりんざんやくしあん
平林山薬師庵
と薬師堂

【薬師堂】



「薬師庵（薬師堂）」乙事公民館横県道17号線の八ヶ岳側に寛永4年（1627年）建立。現在は明和7年（1770年）立て替えられているもの。

永正8年（1511年）武田の家臣「三井（小山）蘭之助基光」が入道して「禅関」と称し持仏薬師如来を安置し「曹洞宗平林山薬王寺」を開く。その後「薬師庵」となり住職と「三井」牧で管理保存を行っている。

【三井武比呂さん談】

三井牧のお寺薬師堂があるあたりは、当時、学校の場など村の中心になっていた

【三井清エ門さん談】

曹洞宗平林山薬王寺が薬師庵となった庵に、安永3年（1774）旅の僧「教智」が訪れ受け入れる。教智はキリスト関係の僧と思われ敷地内に石塔と亡くなる時の名主（総代）「三井甚兵衛」（故三井和雄）宅にマリア観音像（町文化財）が残されている。

場所 乙事史跡マップ番号⑳

秋葉様の石燈籠



【JA 乙事営業所裏】



【下社跡内】

ひのかぐつちのおおかみ

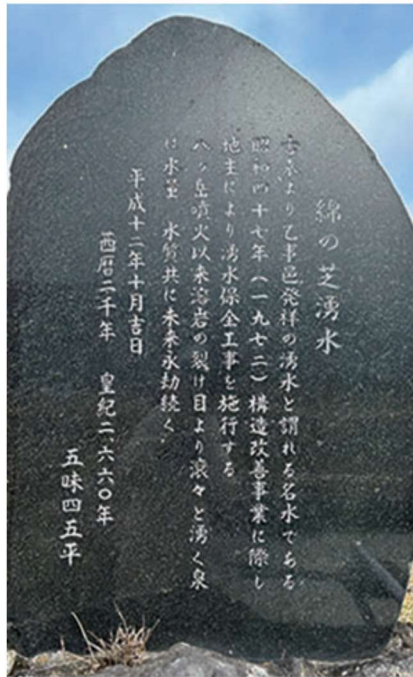
秋葉神社は、火之迦具土大神を祀り、火伏の神様と言われている。

乙事では秋葉講として昭和 20 年頃まで秋葉参りが行われ御札を持ち帰っていた。
また、各地で庚申講や二十三夜講などの祭りも行われていた。

JA 乙事営業所の裏に寛政 13 年 (1801 年) 「庚申燈」を建立。
銘は「奉獻秋葉山・愛宕山大権現」とある。
また、享和 3 年 (1803 年) 「二十三夜供養塔」が建立され、「秋葉山大権現」とある。
これは下辻から下氏神境内 (下社跡) に移設された。

綿の芝湧水

「古来より乙事區発祥の湧水と謂れる名水である」



私は村の発祥地区として頻りに関谷尾根を主張する。

この尾根を中心に、西は前田綿の芝、北村にかけ東は関谷沢に挟まれた地域を云うのであるが、天正の頃そこが中心だったことは確かで、10年3月武田勝頼を逐ってここを通過した織田信忠勢の狼藉に村は跡形もなく焼き払われ以後その場所から西寄りに新しく村造りしたのが今の部落。
(出典②)

と、この石碑に刻まれているが、ここ「綿の芝」は乙事村が最初にできた中心の場所といわれている。初めから乙事村を流れていた水は、この綿の芝からの流れ川と、北沢の二ヶ所だった(出典①)とのこと。

また、文明のお鋤祭りを執行する程に成長した乙骨部落は関谷尾根一帯を居住区とし綿の芝湧水、関谷沢川の用水を利用し、太陽と耕地に恵まれたあの場所にして初めて可能とされる祭礼で(中略)土地を他に求めるのは不可能である(出典②)。

昔人を想像するに、食料や水の得やすいところに集落を求めるなら、この綿の芝が乙事村の発祥の地と考えても良いだろうか。

(出典①)「私の郷土史 乙事・富士見・境筋」

(出典②)「高原の自然と文化 第9号」乙事昔話(一)

夕日山地蔵寺跡



夕日山地蔵寺は、天正10年(1582年)3月、織田氏の兵火にかかって焼失した。このとき、西方150メートルあたりにあった明光寺も焼失。また、西南300メートル、関谷には大門跡があった。現在は、県道17号の上に地蔵寺跡として祀られている。

現在の地蔵寺跡には、元禄11年(1698年)、三代諏訪藩主忠晴によって下賜されたお地蔵様が三体、山林内に祀られていた。

地蔵尊は、昭和30年代後半の県道付け替え工事、関谷地区の農業構造改善事業によって現在地に移された。(県道17号線上に移動)現在は小池氏講が管理。

神庫と称する石室があり、中に地蔵が祀られている。三方の壁に

地蔵寺焼失のこと

正保2年(1645年)に建てられたこと

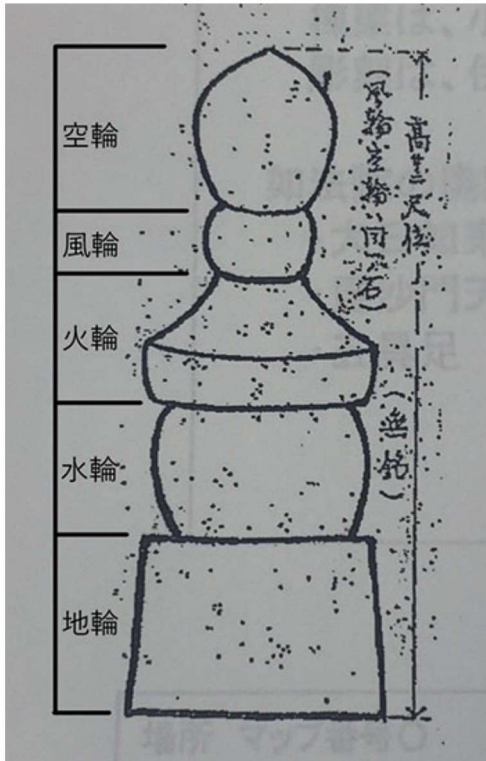
三体の石仏建立のこと、

が刻まれている。



場所 乙事史跡マップ番号②③

せきや ごりんとう
関谷の五輪塔



現在の関谷墓地の東隅に集められているが多くはバラバラ。これは石塔波の一種で室町時代末期のものと推定され、戦国時代、甲斐と諏訪の争いに戦死した武田側の家臣の霊を慰めるために建てられたものと言われている。

(出典) 令和元年度 乙事区文化財保護委員会

古老の口碑によれば今の新墓地(関谷)を造る以前は附近の地藏寺大門跡周辺には非常に沢山あつたが墓地造作時に大部埋めたと言っている。いずれも二尺内外の丈のもので当地産安山岩で出来ていて形式は皆同じである。

(出典) 石神宗平先生 著

本来は上記図の形であったが、現在は写真のようにバラバラの状態に関谷墓地の中にある。



そりのおね かなやまじんじゃ
櫓之尾根の金山神社



関谷尾根の一つ西の尾根が櫓之尾根、その始まる所が金山。
この地帯一帯は、先史時代の遺地として縄文式つぼや皿などが出ている。

竪穴遺蹟もあった所。ここに太郎左エ門は屋敷を構えた。

阿弥陀堂沿革誌に「金山神社や乙事太郎左エ門の安置せし神社として、
同氏卒去后と云えども先例に依り旧6月8日を決めて祭典吉日とし継続
施行す」とある。現在は跡地に祠等が祭ってある。

(出典) 諏訪史蹟要項本郷村編 阿弥陀堂沿革誌

次郎兵衛狼退治と祠

寛政11年(1799年)のある朝、草刈に行った吉右衛門という村人が後沢(赤坂川)で、狼に食い殺されそうになっていた。これを聞いた次郎兵衛は、吉右衛門を見捨てるわけにはいかないと素手で狼に立ち向かい、体中瀕死の重傷を負いながら、仲間と一緒に狼と闘って、遂に狼を仕留め退治した。

このことで、次郎兵衛は、高島藩家老に褒められ、武士にも勝る行為として米拾俵、鳥目拾貫匁と短刀を下賜され、士族に取り立てられた。

次郎兵衛狼退治の祠が乙事陣場記念碑の近くにある。

終戦後新しい戸籍に変わるまで戸籍簿に「士族」が明記されていた。

(三井清エ門さんより)



上伊那郡手良村から諏訪史談会有志の手によって「上諏訪郡乙事村・次郎兵衛狼合戦」と表題された木版版書物が発見され話題となり会は取りあえずこれをコピーをして会員に配ったのがこのブームを起こした原因だったのではと延べている。

家は始祖以来当主が代々次郎兵衛を名乗っているので何代目の人なのかを調べたところ、四代目の人だと確認したと末裔の清人氏は延べている。

(出典：五味清人著「名花を偲ぶ」より)

おっことじんじょう
乙事陣場



(出典) 富士見町教育委員会史跡説明板



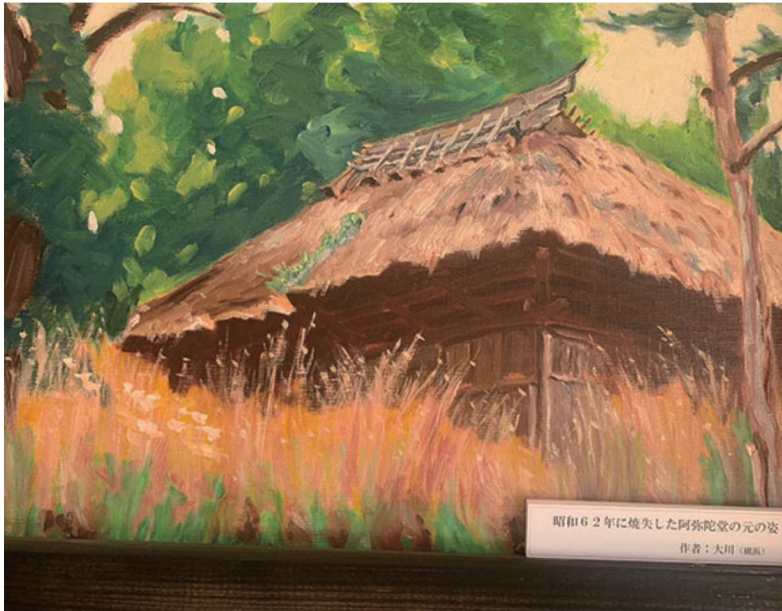
乙事陣場(昭和40年4月25日富士見町指定文化財)は、徳川家康が諏訪を配下にせんと、ここを足場(芦葉)に陣を構えた所。

織田信長が本能寺で滅亡するや、諏訪頼忠はいち早く諏訪の旧領を回復。徳川家康は諏訪氏を服属させようと諏訪を攻略した。一方北条氏直も信州を支配しようとして、四万三千の大軍を率いて佐久方面から進軍してきた。

これを察知した徳川方三千は、乙事まで退いたが北条軍は一里近くまで迫り、両軍はまさに乙事原で衝突しようとする寸前にあった。

のちに徳川軍が布陣した乙事原の地を陣場(陣所)と呼ぶようになった。(出典)「諏訪の歴史」諏訪教育会

阿弥陀堂



【五味長三さん談】
阿弥陀堂について
乙事の中下から
下の人たちが寄付
をして建立了た。
寄付をした人に
お墓を分けてやった

先祖申傳の事項

[阿弥陀如来、釈迦如来、地蔵菩薩の三尊は乙骨太郎左エ門
(安利)の護持仏なり、然るに太郎左エ門は初め自家に庵室を立て阿弥陀、
釈迦如来の二尊を安置し、堂庵の山号を丸林山、寺号を法栄寺と父の法名
(繁室法栄禅定門}を片取り、丸林山法栄寺と申す也}とある。

阿弥陀堂沿革誌に

[太郎左エ門(安利)卒去(元和2年、1616年)后檀徒中相談の上、
慶安元年(1648年)創立せしものにして阿弥陀仏を安置すると同時に太郎左エ門の
異を祭り尚、繭来末孫占の異を祭り永久供養の目的にして建設せしものとす。]
とあるが別葉に今の地に移動せるは寛政元年(1789年)なりともある。

この事項について歴史研究者によれば村の別葉の記録や口碑から寛政元年は
誤りだろうと述べている。

時代は下って明治になって長野県知事から仏事部門と財産管理門を分けるべき
と指摘され仏事は三光寺に頼み世話人は財産管理に務めるようになった。

(出典)阿弥陀堂沿革誌 五味洋一さん阿弥陀堂の今

場所 乙事史跡マップ番号²⁸

しもしゃあと
下社跡
(乙事諏訪社下社跡)



太郎左エ門の屋敷神であったところを末裔が氏神としたもの。

文化8年(1811年)諏訪神社乙事鎮守社と呼ばれ、昭和25年上・下社合併により、本殿を上社へ移築し、この地を"下社跡"とした。

この下社跡には、別掲の弓箭神社と三峯神社が移転している。

【五味洋一さん談】

下の氏神様はもともとは五味家の神社で、石碑の中を見れば五味一族の系譜がわかる

場所 乙事史跡マップ番号⑳

みつみねじんじゃ
三峯神社



埼玉県秩父市三峰の三峯神社が発祥の地、 守護神は狼を祀る。

狼は、農作物に被害を与える猪、鹿などを追い食し、火災や盗難をしらせてくれる。したがって三峯神社を信仰すれば、猪や鹿を退治し、火災や盗難除けになる。そこで、猪や鹿の被害に悩まされていた村では、三峯講を起こし、代表者が参詣しお札を受け、南沢東尾根に講地を設け、社でお札を祀り信心した。

最初の設置は文政3年(1821年)。昭和29年道路拡張の折、下社跡に移転した。

(出典)乙事の信心山岳信仰(佐久吉文)

きゅうせんじんじゃ
弓箭神社



(出典)

乙事の信心 山岳信仰 (佐久吉文)、
富士見町乙事散策ガイド(信濃路てくてく)

弓箭神社の伝説

大下東組の六地蔵の辻では、子供たちが「道切り(道に荒縄を張って、そこを通る通行人から喜捨を受ける宗教行事)をしていた。馬に乗ったひとりの侍が通り、子供たちが「道祖神へお賽銭をあげろ」とねだったが、土地のしきたりを知らない侍は、子供たちをしかりつけた。子供が弓に箭をつがえて射たところ、侍の目にささり、看護の甲斐なく亡くなった。その後、この子供の家族などに不幸が続き、亡くなった侍の祟りではないかと、その霊を慰めるために弓箭神社として祀った。

南沢東尾根区有地高台に、講中によって石祠を建て、鳥居・石段を設け、手洗いの水石を置き幟を奉納、神社としての結構を見た。

[名前の由来]

弓箭神社を里人たちは[お弓箭さま]と愛称し、戦前までは広く信仰され親しまれてきた。大下東組に六地蔵の辻というところがあった。

今は道路が拡張されて、六地蔵も道祖神も公会堂もよそに移されているが、当時の子供達のよい遊び場であった。信仰の内容は諸々の願い事、馬の病気、とりわけ眼病に願意が叶えられたとのことである。

新造は安政2年(1855年)、昭和29年現在の下社跡に移転した。

神社にある石は重さが願いの重さであり、石を持ち上げた時に軽いと感じれば願いが叶うの言われている。

場所 乙事史跡マップ番号③①

道

(棒道・逸見道・嶽道)

棒道・逸見道

甲斐から諏訪へ、乙事村を通過する道は三通りあり、逸見道(へみみち)と古図にある。信玄が軍用道路として直線化や整備をしたとされ、後の近世江戸時代に棒道と呼ばれるようになった。逸見とは甲斐源氏宗家で甲斐北西部に勢力をもっていた。

上の道 小荒間の三分の一の湧水(長坂)から甲六沢を通り、鉢巻道路の下を平行して進み、仏供石の脇を通り、糠塚(牛馬に水やえさをあげる場所)を超え、稗の底湧水に出て、切掛沢に達し、千ヶ沢、立場川を渡り、原村地籍を抜ける。上槻木の上、芹ヶ沢、大門峠に通ずる。

⇒三分の一湧水から稗の底湧水まで約13里あり、稗の底湧水で水を汲み、近くの糠塚で牛馬に水や餌をあげていた。このように水が出るところをつなぐ形で道を作っていた。

中の道 大井ヶ森(長坂)から葛窪を通り、小六(小六石)、土もぐり土橋(小母沢川)、から、口留番所(関所)を通り、乙事中組公会堂付近を抜け、立沢、中新田、柳沢、中沢、湯川に通ずる。

⇒もともとは小六の集落の中を曲がりくねっていた道を、武田信玄が、乙事に対して、土もぐり土橋から赤坂(鷹ノ巣)までを棒道のようにまっすぐにするようにと命じて整備させた。武田信玄はこのように戦いのため、効率よく進めるよう、まっすぐに道を作った。

下の道 先達から、池生神社を通り 烏帽子の上から母沢、矢の沢に出て、現在の海洋センターを通り、立場川をわたり、現在の富士見高原病院の裏を通り、中の道と合流する。

嶽道 嶽道の記述は散見されず権現信仰から権現岳より乙事諏訪神社に通じた道と言い伝えられている。 (出典)五味長三さんからの聞き取りより

おうたくざんかんのん
桜沢山観音



桜沢山観音は中組名取保家、第3代目宗左衛門成俊の妻（本名不明、寛政2年（1790年没））が志により、四国及び西国を巡礼して信心を広く伝えたことが、乙事村民が知ることにより旧土橋左折西側の道路敷きにて、乙事村の賛同を得て観音堂として建立され、彼女の功德を偲び、桜沢山観音講を起す。また、桜沢山無尽講も行われ併せて、功德を偲んでいる。

（出典）乙事の信心「山岳信仰」 佐久吉文 著

五味太郎左エ門 と太郎乙

(五味太郎左エ門)

太郎左エ門(安利)は三河の浪人で甲斐に移り、武田家の与力として仕えていた。天正3年(1575年)長篠の戦いの後、訳あって乙骨邑に引き籠って名主を勤めていた。天正10年(1582年)織田軍の兵火に捲き込まれ、再び武士に還らざるを得なかった。ここから徳川軍に協力するようになり家康から八王子屋敷と乙事の姓を与えられ乙骨邑から離れていった。その後、五代目太郎左エ門(安蔵)が乙事氏から乙骨氏に改姓した。

(出典) 小伝 乙骨家の歴史(永井 菊枝)

今の世となり昭和2年4月末裔の乙骨半二氏(元検事・弁護士)が阿弥陀堂に参詣に来られている。さらに先の大戦の折には、疎開で半二氏一家や乙骨家の方々が富士見町を始め原村等に来られている。昭和44年1月6日付の毎日新聞に「歴史の不思議さ—ある元旦儀式の歌」と題する司馬遼太郎氏の随筆に第12代太郎乙が関わっていたことが載っていた。

(乙骨太郎乙)

太郎左エ門を先祖に持つ第12代の乙骨太郎乙は、旧幕臣であったが明治維新で徳川慶喜が静岡へ移った時、忠義を立てて同行。徳川家が作った沼津兵学校で英語を教えていた。

明治2年(1869年)、イギリスから貴賓が来航されることになり、明治政府が歓迎の準備を始めた。国が貴賓を迎える際に、奏楽が必要であり、イギリス公使館で軍楽隊長を務めていたフェントンが「日本の国歌は何か」と接待役に聞いた。

接待役の一人であった、薩摩藩士の原田宗助は上司の川村純義に相談したところ「歌ぐらいのことでいちいち相談すつことがあるか」とどなりつけられた。そこで同役の乙骨太郎乙に相談した。太郎乙は、旧幕臣で、大奥のしきたりを知っていて大奥が元旦に行っていた儀式「おさざれ石」を思い出し、その中で使われていた歌「君が代」を国歌の歌詞にどうかと提案し、一同が賛成した。それをフェントンが楽譜にとり、日英両国の国歌斉唱が行われた。これにより国歌「君が代」誕生の由来である。

(出典) 「海軍70年史談」、司馬遼太郎「歴史の不思議さ ある元旦儀式の歌」

道祖神・お神楽

道祖神は乙事区内に7ヶ所ある

大上手・向 乙事諏訪社上社 入口右 文化2年(1805年)

南 乙事諏訪社上社 入口左 文化7年(1810年)

中林 中林組公会堂 前 文化1年(1801年)

西林 乙事区役所 東 宝暦9年(1759年)

中 阿弥陀堂 東 文化6年(1809年)

中下 中下組公会堂 前 安永2年(1773年)

大下 乙事諏訪社下社跡 境内 享和3年(1803年)

道路拡幅工事のため、ほとんどの道祖神が移され現在の位置に



お神楽は、明和3年(1766年)京都からの旅人が乙事の三井権右衛門宅(三井盛信さんのご先祖)に宿泊した際、お礼として近隣の若者を集め、お神楽を教え7カ所の道祖神の前で舞ったことが始まりである。後に各道祖神ごとに家々を廻り舞を奉納している。

村人は悪疫も天候異変もすべて悪霊のなせる業と考え、祈祷や祭礼によって退散させるものと信じられていた。水神ともいわれ、稲作の守護神として豊作祈願のうえからも、百姓から信仰され村中に広がっていった。(出典)大下組、西林組の「乙事お神楽の由来」より

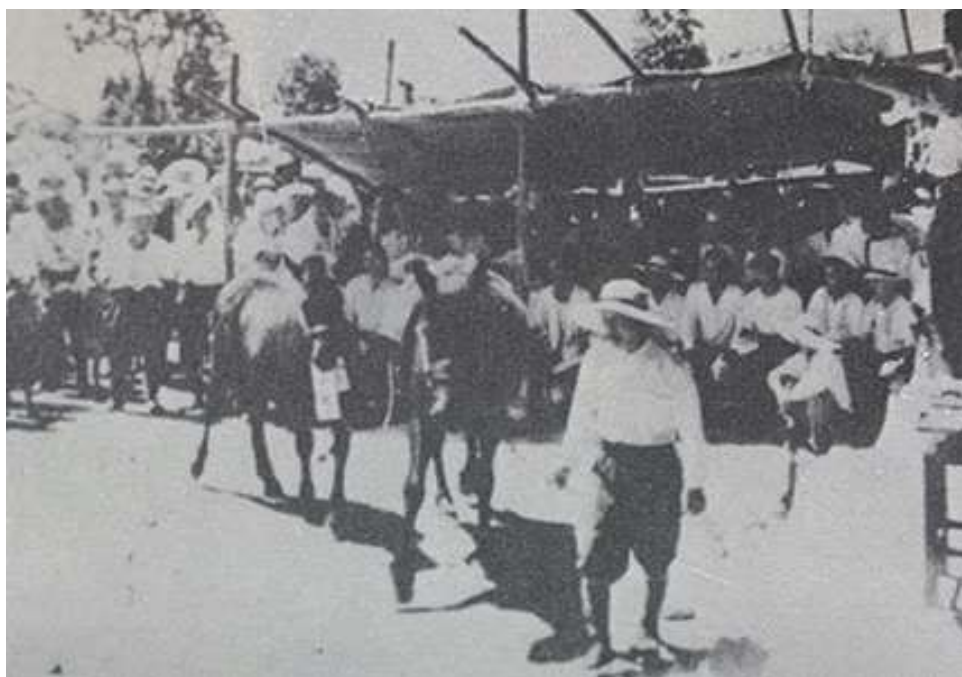
お神楽は、道祖神ごと、舞い方、笛、太鼓などに違いがある。これは、道祖神ごとに代々伝えられてくる間に、少しずつ変わってきたのではないかと考えられる。

大下組のお神楽は、平成22年、町の指定民俗文化財に指定された。

現在も、祇園祭に合わせて舞われているのは

大下組、西林組、大上手・向組、中組

乙事の馬市 (仔馬市)



乙事は古くから有名な馬産地で、“とうね市”といって仔馬の競り市があった。諏訪近辺ただ一か所の市で、盆過ぎの三日間、旧乙事小学校前（注：現在の公民館）でにぎやかに馬市が行われた。

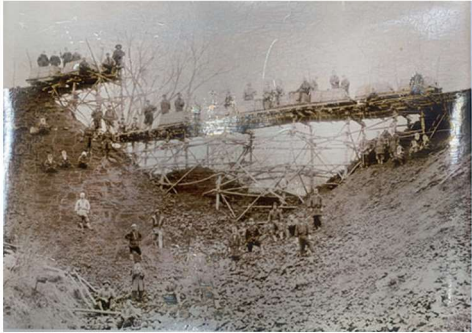
その日は立ち並ぶ屋台を囲む子供の群れ。親子の馬と別れを惜しむ家族。広場に繋がれた沢山の馬の列。村祭り以上の賑わい。

乙事の馬市は、藩制が終わった明治19年からのこと。

♪ 夏が来たかや市場の森に とうね競った競ったすてれこしゃんしゃん ♪

(出典) 昭和と乙事 戦中・戦後の食の記録 (久保川十三男氏 他)

中丸沢の道づくり



【藤沢あきらさん、北原ひとみさん談】

小学校に通っているときに
乙事の住民総出で作っていった。
学校帰りにトロッコに乗って遊んで
大人に怒られちゃった！

乙事から本郷小学校まで行く中丸沢川の橋は、昭和7年に本郷小学校への通学路として工事が着工され、10年の年月を経て昭和17年に完成した。

中丸沢の道ができるまでは、乙事の子供たちは、沢組の西久根の北方坂におりて、木の橋を越えて、根っこ坂（木の根っこ）の根につかまって坂を上り、「御別当田んぼ」の方にぬけるなど非常に苦勞して学校に通っていた。

春先や雨の日等は泥塗れとなり、履物を取られたりして、泥だらけの通学だったという。中丸沢の道の建設にあたっては、乙事の住民が人足として参加し、トロッコで土を運ぶなど住民手作りの道づくりが行われた。途中何度か道が沈み、土を運び直すなど試行錯誤しながら建設された。

このように、今の子供たちが毎日通っている中丸沢の道は乙事の先人たちの尽力の末に完成したものである。

（五味一磨さん、五味佳信さん、佐久たけこさん、藤沢あきらさん、北原ひとみさんからの聞き取り及び乙事区年表より）

【五味長三さん談】

古い道路は今は通れない。御別当の東尾根である。このトロッコで中組では、後沢、北沢などの谷を補修した。

昔の暮らし

(自給自足の暮らし)

- ・昭和30年代頃まで馬と牛と一緒に家で、4割ぐらいが茅葺の家。馬が日の当たる一番いい場所にいた。馬や牛に農具を引かせて、馬のたい肥を肥料にした。
- ・山から落ち葉をさらって、馬の敷き藁を農地にまき、庭の剪定枝(かっちき)の先の方を田んぼにいれた
- ・自給自足の暮らしで各家庭で味噌、醤油を作っていた。暖房には薪を使っていた。
- ・どの家にも井戸と使川(川のほとりにある洗い場)があった。川で洗濯、食器を洗った。
- ・農家であっても収穫したお米は税金として供出する必要がありお米は食べられず、うどん、そば さつまいもなどでおじやや、おすいとんを食べていた。
かぼちゃを食べ過ぎて肌が黄色くなった。
- ・干し草、木の葉をひろって、薪にまきつけて、学校まで持っていった。
- ・春、夏、秋3回桑の葉を蚕に食わせるため、びくを持ってくわの葉を集めた。
- ・熱いお湯の中で糸をとった後にでてくる「さなぎ」を食べた
- ・みんな格差がなく、幸せだった。物が無いからほしいものがない。

(移動など)

- ・昭和30年頃～40頃まで自転車で移動をしていた。
オート3輪(三輪のバイクのようなもの、ハンドルはバイクそのもの、後ろには荷台があり、物を運搬できる便利な車)に乗っていた。
- ・昔は国鉄の線路を歩くことができた。米買(やみ米)の人が、富士見の駅に集荷場があり、トンネルをこえて往復した。

(出典) 五味一磨さん、五味佳信さん、佐久たけ子さん、藤沢あきらさんからの聞き取り

盃流し記念碑



「曲水」犬養毅・「神仙秘境」小川平吉

大正14年8月30日、犬養毅（木堂）氏と小川平吉（射山）氏（後の総理大臣と副総理）は、乙事山岳会の接待にて、八ヶ岳中腹の「盃流し」（曲水溪）の観賞と茸狩り、手打ち蕎麦を楽しんだ。

これを記念し、昭和6年10月11日二人の書を現地の自然石に刻み碑として残した。



杯流しにて「犬養毅」と乙事山岳会




▲直筆

その後、犬養氏と乙事との交流は暗殺されるまでの間続いた。

この両碑は、平成30年の台風災害により流され行方不明。3年後の令和3年8月30日に発見され、現在は「盃流し」約300m下流の土手に移築されている。

また、犬養「曲水」、小川「神仙秘境」の直筆は乙事公民館に保管されている。

（出典）五味幸男氏資料



乙事学お宝図鑑 の作成について

この乙事学お宝図鑑は、区長の下に「乙事文化財保護委員会」を軸に、乙事学推進プロジェクトチームを結成し、長野県の地域発「元気づくり支援金」事業を活用して、御柱祭を契機とした「乙事学」プロジェクトの一環として作成しました。

令和4年6月から毎月会議を開催し、乙事区の歴史家の先生方への聞き取り調査、文献調査、歴史家の諸先輩方による区内史跡、歴史資産巡りを行ったうえで、乙事学プロジェクト推進委員会のメンバーが分担をして、図鑑の原稿を作成しました。

ご協力いただいた歴史家の諸先輩方等に心より御礼を申し上げます。

本お宝図鑑に掲載した歴史資産については、根拠となる文献が残っていないもの、諸説があるものなどがありますが、乙事区の諸先輩方がまとめられたこれまでの書物やいい伝え等を参考にし、可能な限り出典を明記する形でまとめております。今後新たな根拠や別の説が明らかになれば修正をしていきたいと考えています。

【乙事学プロジェクト推進委員会】

事業推進リーダー：三井一照、五味克弘、久保川道矢、中島恵理

推進メンバー：五味俊、佐久憲義、平出修一、五味左千雄、三井芳章、佐久清仁、名取淳、名取優子、築館千枝

【乙事お宝図鑑作成にお世話になった区内の先生方及び諸先輩方】

佐久吉文さん、五味長三さん、三井清エ門さん、三井武比呂さん、五味洋一さん、鈴木清さん、五味一磨さん、五味佳信さん、藤沢あきらさん、佐久たけこさん、北原ひとみさん

編集・発行

乙事区 乙事学プロジェクト推進委員会

〒399-0213 長野県諏訪郡富士見町乙事 5287

電話 0266-62-2275

<https://okkoto.jp>

発行日 令和5年3月

本冊子は、「長野県地域発元気づくり支援金」を活用して作成いたしました。

